

## 『野球規則を正しく理解するための野球審判員マニュアルー規則適用上の解釈についてー第4版』

## 2020年～2023年修正一覧

ページ	現 行	修 正	備 考									
23	1 1845年に初の野球規則が誕生	<p>1 1845年に初の野球規則が誕生 表の末尾に次の表を追加する。</p> <table border="1"> <tbody> <tr> <td>2021</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>● チップしたボールが最初に“捕手の身体または用具”に触れた後に捕手が地上に落ちる前に捕球した場合、正規の捕球として認められることとした。(それまでは最初に“捕手の手またはミット”としていた。)</li> <li>● 2アウト後のファウルの打球に対する守備を、塁から離れている走者が妨害した場合、それが故意か否かに関係なく走者がアウトになり、打者は打撃を完了したものとみなし、次の先頭打者は次打者とした。</li> </ul> </td> <td rowspan="3">2021 規則改正</td> </tr> <tr> <td>2022</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 捕球されずに本塁周辺にとどまっている投球が、打者または審判員によって不注意にそらされた場合、ボールデッドとなって、塁上の走者は投球当時占有していた塁に戻る。この投球が第3ストライクのときは、打者はアウトになるとした。</li> <li>● アマチュア野球においても、windアップポジションにおける自由な足の位置はフリーとした。また、投手が軸足を投手板に並行に触れ、自由な足を投手板の前方に置いた場合、走者がいないときはwindアップポジションで投球ができる、走者がいるときはセットポジションで投球するものとみなされるとした。</li> </ul> </td> <td>2022 規則改正</td> </tr> <tr> <td>2023</td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 先発投手に限って、打順表へ投手と指名打者の双方に同じ者が記載でき、その役割を果たせる規則が加わった。</li> </ul> </td> <td>2023 規則改正</td> </tr> </tbody> </table>	2021	<ul style="list-style-type: none"> <li>● チップしたボールが最初に“捕手の身体または用具”に触れた後に捕手が地上に落ちる前に捕球した場合、正規の捕球として認められることとした。(それまでは最初に“捕手の手またはミット”としていた。)</li> <li>● 2アウト後のファウルの打球に対する守備を、塁から離れている走者が妨害した場合、それが故意か否かに関係なく走者がアウトになり、打者は打撃を完了したものとみなし、次の先頭打者は次打者とした。</li> </ul>	2021 規則改正	2022	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 捕球されずに本塁周辺にとどまっている投球が、打者または審判員によって不注意にそらされた場合、ボールデッドとなって、塁上の走者は投球当時占有していた塁に戻る。この投球が第3ストライクのときは、打者はアウトになるとした。</li> <li>● アマチュア野球においても、windアップポジションにおける自由な足の位置はフリーとした。また、投手が軸足を投手板に並行に触れ、自由な足を投手板の前方に置いた場合、走者がいないときはwindアップポジションで投球ができる、走者がいるときはセットポジションで投球するものとみなされるとした。</li> </ul>	2022 規則改正	2023	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 先発投手に限って、打順表へ投手と指名打者の双方に同じ者が記載でき、その役割を果たせる規則が加わった。</li> </ul>	2023 規則改正	
2021	<ul style="list-style-type: none"> <li>● チップしたボールが最初に“捕手の身体または用具”に触れた後に捕手が地上に落ちる前に捕球した場合、正規の捕球として認められることとした。(それまでは最初に“捕手の手またはミット”としていた。)</li> <li>● 2アウト後のファウルの打球に対する守備を、塁から離れている走者が妨害した場合、それが故意か否かに関係なく走者がアウトになり、打者は打撃を完了したものとみなし、次の先頭打者は次打者とした。</li> </ul>	2021 規則改正										
2022	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 捕球されずに本塁周辺にとどまっている投球が、打者または審判員によって不注意にそらされた場合、ボールデッドとなって、塁上の走者は投球当時占有していた塁に戻る。この投球が第3ストライクのときは、打者はアウトになるとした。</li> <li>● アマチュア野球においても、windアップポジションにおける自由な足の位置はフリーとした。また、投手が軸足を投手板に並行に触れ、自由な足を投手板の前方に置いた場合、走者がいないときはwindアップポジションで投球ができる、走者がいるときはセットポジションで投球するものとみなされるとした。</li> </ul>		2022 規則改正									
2023	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 先発投手に限って、打順表へ投手と指名打者の双方に同じ者が記載でき、その役割を果たせる規則が加わった。</li> </ul>		2023 規則改正									

		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 天候により試合が途中で打ち切られた場合について、正式試合として成立する前においてもサスペンデッドゲームを適用できることとなった。</li> </ul>	
29	<p>7 不適合バットと違反バット 最終パラグラフ</p> <p>なお、2016年の改正により、打者が規則違反のバットを持って打席に立った場合でも、そのバットに起因しない盗塁、ボーク、暴投、補逸などにより打者が進塁したとき、その進塁は認められることが加筆された。これは、打順の誤りの場合（6.03(b)(5)）と取り扱いを同じにしたものである。</p>	<p>7 不適合バットと違反バット 最終パラグラフの一部を修正する（朱書き部分）。</p> <p>なお、2016年の改正により、打者が規則違反のバットを持って打席に立った場合でも、そのバットに起因しない盗塁、ボーク、暴投、補逸などにより走者が進塁したとき、その進塁は認められることが加筆された。これは、打順の誤りの場合（6.03(b)(4)）と取り扱いを同じにしたものである。</p>	2020 修正
30	<p>8 着色バット</p>	<p>8 着色バット 第1パラグラフの一部を修正する。（<u>下線部</u>を追加）</p> <p>フレームテンパー（焼き加工）については、2018年のシーズンから、①バットの握り部分端から18インチ（45.7cm）より先端に施すこと、②塗装カラーではないので、<u>その加工については、全面加工に限らず、一部だけの加工についても認められるが、表示が容易に見える濃さまでの焼き加工とすること。</u>③それぞれの表示は焼印によるか、焼印の自然色または黒色とすることとされた。</p>	2023 修正
32	<p>12 投手用のグラブ 表の[縫い糸]の[社会人・大学・軟式]</p>	<p>12 投手用のグラブ 表の[縫い糸]の[社会人・大学・軟式]の一部を変更する。</p>	2021 変更

	<p>白色、灰色、シルバー以外とする。ただし、光沢のある色および目立つ色は認められない。</p> <p>[社会人・大学・軟式] 材質：布片、刺繍または野球規則委員会の承認を受けた樹脂製成型物（エナメルによる表示は認められない）によるもの 品名、品番、マーク類などをスタンプによって表示する場合の色は、ブラックまたは焼き印の自然色でなければならない。</p> <p>[高校] 材質：布片に刺繍または樹脂製成型物のほか、連盟が認めたものとする。</p>	<p>社会人・大学：白色、灰色、シルバー以外とする。ただし、光沢のある色および目立つ色は認められない。 軟式：制限なし</p> <p>表の[マーク類]の一部を変更する。</p> <p>[社会人・大学・軟式] 材質：布片、刺繍または野球規則委員会の承認を受けた樹脂製成型物（エナメルによる表示は認められない）あるいはスタンプによるもの 品名、品番、マーク類などをスタンプによって表示する場合の色は、ブラックまたは焼き印の自然色でなければならない。また、個人オーダーは認められず、メーカー既成のものとする。</p> <p>[高校] 材質：布片に刺繍または樹脂製成型物あるいはスタンプのほか、連盟が認めたものとする。</p>	2022 規則改正
33	13 野手のグラブ	<p>13 野手のグラブ 末尾に次のパラグラフを追加する。</p> <p>2022 年の規則改正において、規則 3.09[注 3]③の第3段落が次のように変更された。（<u>下線部</u>を追加）</p> <p>マーク類を布片、刺繍または樹脂製の成型物、<u>あるいはスタンプ</u>によって表示する場合（エナメル素材のように光る素材での表示は認められない）は、親指のつけ根に近い個所に限定し、その大きさは、縦 3.5 釐、横 3.5 釐以下でなければ</p>	2022 規則改正

		<p>ならない。</p> <p>なお、このスタンプについては、個人オーダーは認められず、メーカー既成の範囲で容認することとされた。</p>	
34	16.ヘルメットの着用 第3パラグラフを変更	<p>16 ヘルメットの着用 第3パラグラフ全部を次のように変更する。</p> <p>2021年6月に顎ガード付きのヘルメットがSG基準の適用範囲に追加され、その後メーカーの生産体制が整ったことから、同年12月にアマチュア野球規則委員会は、SG基準適合の顎ガード付き打者用ヘルメットの使用を認める通達を出した。</p>	2022 変更
35	17 捕手および審判（球審）用のマスク 最終パラグラフ	<p>17 捕手および審判（球審）用のマスク 最終パラグラフの一部を変更する。</p> <p>この通達では、選手及び審判員の安全を確保することを目的に、捕手（審判員を含む）用のマスクについてSGマーク合格品であることを、2020年シーズンから義務付けた。なお、<del>2017年から2019年シーズンまでは、猶予期間とした。</del> <del>軟式野球では、2022年シーズンから義務付けることとした。</del></p>	2021 変更
35	18 リストガード 19 手甲ガード 20 リストバンド	<p>18 各種保護具の使用と商標表示 18の標題を変更、19、20を削除して、以下の番号を繰り上げる。 18の本文を次のとおり変更する。</p> <p>手袋、レッグガード、エルボーガードなどの保護具の使用の可否や商標表示の規制について、次の表にまとめた。</p>	2021 変更
	全文を削除		

		※一覧表については別紙「保護具の商標表示等の規定一覧」のとおり。	2022「規定一覧」の一部変更
36	23 スパイクシューズ	23 スパイクシューズ 第2パラグラフの全部を次のように変更する  高校野球では、熱中症対策の一環として、2020年のシーズンインから表面が白色単色のものを認め、それまでの黒色単色との混在を認めていたが、2年間の猶予期間を経て、2022年のシーズンインからチーム内で色を統一するか否かについて検討したところ、多くの都道府県連盟の要望もあり、当面混在を認めることとした。	2022 変更
51	15 投球、送球、ゴロの打球を捕った勢いでボールデッドの個所に入る	15 投球、送球、ゴロの打球を捕った勢いでボールデッドの個所に入る 表題を次のように一部変更する。  15 打球、投球、送球を捕った勢いでボールデッドの個所に入る	2022 変更
68	32.故意落球	32 故意落球 末尾に次のパラグラフを追加する。  外野手が、外野でダブルプレイを目的として故意に飛球やライナーを落とした場合、故意落球の規則が適用できるか？ MLB UMPIRE MANUALには、「(故意落球の規則は) 外野手が内野近くまで来て、ダブルプレイを目的として故意に飛球やライナーを落とした場合にも適用される。」と書かれている。2021年7月に開催された日本野球協議会オペレーション委員会審判部会において、日本においてもこの考え方を採用することが確認された。	2022 変更
69	33.ラインアウト	33 ラインアウト 69 ページの上から 10、11、13 行目の一部を削除する。  走者が、野手の触球を避けて、走者のベースパス (走路) から3フィート以上	2022 規則改正

		<p>離れて走った場合、その走者にはアウトが宣告される（ラインアウトでアウト）。この場合のベースパス（走路）とは、タッグプレイが生じたときの、走者と塁を結ぶ直線のことである。（5.09(b)(1)）。<del>通常の走者の走路とみなされる場所は、塁間を結ぶ直線を中心として左右へ各3フィート、すなわち6フィートの幅の地帯を指すが、走者が大きく膨らんで走っているときなど最初からこの走路外にいたときに触球プレイが生じた場合は、その走者と塁を結ぶ直線を中心として左右へ各3フィートが、その走路となる。（同[注1]）</del></p> <p>では、「走者と塁を結ぶ直線」とあるが、「塁」とはどちらの塁を指すのだろうか。それは、走者が向かおうとしている塁（あるいは走者の体が向いている方の塁）と解釈している。したがって、理屈上は、ランダウンプレイではその塁がくるくる代わることになる。</p>	
92	49 コーティシーランナー（臨時代走）	<p>49 コーティシーランナー（臨時代走） 第4パラグラフ以降の一部を次のように変更する</p> <p>高校野球の「特別規則」では、次のようになっている。</p> <p>試合中、攻撃側選手に不慮の事故などが起き、治療のために試合の中断が長引くと審判員が判断したときは、相手チームに事情を説明し、臨時代走者を適用することができる。この代走者は試合に出場している選手に限られ、チームに指名権はない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 臨時代走者は、アウトになるか、得点するか、またはイニングが終了するまで継続する。ただし、塁上にいる臨時代走者が次打者となるケースにおいては、その臨時代走者に代えて打撃を完了した直後の者を新たな臨時代走者とする。</li> <li>● 臨時代走者に代走を起用することはできる。この場合、負傷した選手は正規の交代となり以後出場できない。 <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 打者が死球などで負傷した場合 投手を除いた選手のうち、打撃を完了した直後の者とする。</li> <li>(2) 塁上の走者が負傷した場合</li> </ul> </li> </ul>	2022 変更

		<p>投手を除いた選手のうち、その時の打者を除く打撃を完了した直後の者とする。</p> <p><b>(参考)</b> 臨時代走者の記録上の取り扱いは、盗塁、得点、残塁などすべて元の走者の記録と扱われる。</p> <p><b>【例外】</b> 走者二塁、三塁、二・三塁、一・三塁の場合において、ボーク宣告後の投球が打者の体に触れたとき（体の部位を問わない）は、ボークが適用され、打者は打撃を継続する。</p> <p>ここで注意が必要なのは、・・・。</p>	
94	50 いったん試合から退いたプレイヤーの再出場	<p>50 いったん試合から退いたプレイヤーの再出場 末尾に次の例題4を追加する。</p> <p>例4：5回表、二塁手Aの代打Bがヒットを打った。次の一塁手Cの打順に退いたAが打席に立ち、内野ゴロを打ってアウトになった。ここで守備側が<u>打順の誤り</u>を指摘した。</p> <p>処置4：このケースは打順の誤り（6.03(b)）ではなく、“再出場不可”の規則である5.10(d)が適用される。すでに退いているAがプレイをした後に“再出場”に気づいたので、Aのプレイ（内野ゴロでアウト）は有効であるが、正位打者であったCも試合から退かなければならず、5回裏の守備ではAおよびC以外の者が二塁および一塁にそれぞれつかなければならない。（規則5.10(d)、同【原注】）</p> <p>例4のような“打撃順の誤り”と“いったん試合から退いたプレイヤーの再出場”の関係については、次のように整理できる。</p> <p>① 守備側は打順の誤りを指摘している。“再出場不可”の規則5.10(d)を適用してもいいのか。</p>	2021 追加

		<p>→ 守備側が打順の誤りをアピールしたときに、球審はAがすでに試合から退いていることに気づかなければならない。球審が気づかなくても、他の審判員、いずれかのチームの監督、記録員などが指摘することができる(6.03(b)[原注]、9.01(b)(2) [注])。たとえ守備側が打順の誤りをアピールしたとしても、それによって誰かが気づけば5.10(d)を適用することはできる。</p> <p>② 打順の誤りについては、審判員([6.03b 原注])や記録員(9.01(b)(4))は指摘できないことになっている。</p> <p>→ この事例は“再出場不可”の規則が適用されるので、指摘することができる。打順の誤りを規定した規則では「打順表に記載された打者が、その番のときに打たないで・・・」(6.03(b)(1))とあり、Aは代打を送られた時点で“打順表に記載された打者”ではなくなる。よって、[6.03b 原注]や9.01(b)(4)(打順の誤りは指摘できない)は適用されない。</p> <p>③ 攻守交代の後(5回裏)、Cは守備につけるか。</p> <p>→ Cは守備につくことはできない。他の控え選手が一塁の守備位置につくことになる。これは、たとえば、Aがヒットを打った後に守備側がアピールしたときも同じことになり、Cではなく他の控え選手をAの代わりに走者とする。</p> <p>④ たとえば、投手がAに投球する前に、守備側が打順の誤りを指摘していたらどうするか。</p> <p>→ 球審は、規則5.10(d)に基づきCを打席に立たせる。(④、⑤、⑥は球審などがAの再出場に気づくことが前提)</p> <p>⑤ たとえば、投手がAに1球投げた後に、守備側が打順の誤りを指摘していたらどうするか。</p> <p>→ 球審は、規則5.10(d)に基づきCの代わりに他の控え選手をAのカウントを引き継いで打席に立たせる。</p> <p>⑥ Aの内野ゴロによるアウトは、誰に記録されるのか。</p> <p>→ 9.03(d)(打順の誤りがあったときの記録法)では“試合に出場している</p>	
--	--	---	--

		プレーヤー”、“試合に出場しているべきプレーヤー”、“試合に再出場したプレーヤー”を区別していない。よって、Aのアウトが記録されるのは“試合に出場しているべきプレーヤー”のCとなる。	
97	54 指名打者 (Designated Hitter)  指名打者については、2011年の規則改正で詳細に、かつ箇条書きに分かりやすく規定されている(5.11(a))。指名打者を使うかどうかは、チームの任意である。以下省略。	54 指名打者 (Designated Hitter) 冒頭の1文を残し、以下を全て変更する。  指名打者については、2011年の規則改正で詳細に、かつ箇条書きに分かりやすく規定されている(5.11(a))。  規則5.11(a)の(8)、(9)、(10)、(11)、(12)、(14)に“指名打者の役割は消滅する”と書かれている。これは、これらの規定により“指名打者の役割が消滅した”場合、それ以後の選手の交代や打撃順の指名については、指名打者ルールを使用していないときと同じように進めていくことになる。 試合開始のときの先攻チームの打撃順を次のように設定し、指名打者の役割が消滅した後の打撃順指名について例題で確認したい。 投手AA、5番DH：B、6番レフトC、7番ショートD、8番ファーストE  <b>例題1</b> ：5番DHのBがレフトの守備についた。 ——DHは自分の番のところで打撃を継続する。投手AはレフトのCの打順に入る。(5.11(a)(5)) 打順：5番レフトB、6番ピッチャーA  <b>例題2</b> ：5番DHのBがレフトの守備につき、ショートもDからFに交代した。 ——投手AはレフトCまたはショートDのどちらの打順に入っても良い(5.11(a)(5))。指名打者は、多様な交代があっても打順を変えることは許されない(5.11(a)(7))。 打順①：5番レフトB、6番ピッチャーA、7番ショートF 打順②：5番レフトB、6番ショートF、7番ピッチャーA	2021 変更

		<p><b>例題 3</b> : 5 番 DH の B がレフトの守備に、投手 A がファーストの守備につき、救援投手 G が登板した。</p> <p>——DH は自分の番のところで打撃を継続し、ファースト A と救援投手 G はレフト C またはファースト E のどちらの打順に入っても良い (5.11(a)(5)、同(a)(7))。</p> <p>打順① : 5 番レフト B、6 番ピッチャー G、8 番ファースト A 打順② : 5 番レフト B、6 番ファースト A、8 番ピッチャー G</p> <p><b>例題 4</b> : 1 回の表、攻撃側の監督は 5 番 DH に代打を申し出た。この交代は認められるか。</p> <p>——相手チームの先発投手が交代していない場合、この交代は認められない。(5.11(a)(2))</p> <p><b>例題 5</b> : 投手 A がファーストの守備につき、ファースト E が投手になった。</p> <p>——投手だった A は DH の打順に入る。(5.11(a)(8))</p> <p>打順 : 5 番ファースト A、8 番ピッチャー E</p> <p><b>例題 6</b> : 投手 A がファーストの守備につき、ファースト E に代わって救援投手 G が登板した。</p> <p>——ファーストの守備について A は DH の B、または、ファースト E のどちらかの打順を選択することができる。(5.11(a)(8)、5.10(b)[原注])</p> <p>打順① : 5 番ピッチャー G、8 番ファースト A 打順② : 5 番ファースト A、8 番ピッチャー G</p> <p>上記の例題 3、5、6 の投手 A は、規則 5.10 による投球義務を果たしていることが条件となる。</p> <p>また、たとえば、1 回表、相手チームの先発投手が交代することなく 4 番打者</p>	
--	--	--	--

		<p>で攻撃が終わり（DHのBは打席に立っていない）、1回の裏に例題5のような交代はできるだろうか。答えは、認められる。指名打者が一度も打席に立たないまま（相手の先発投手は交代していない）、そのチームの投手が他の守備位置についたり（5.11(a)(8)、他の守備位置にいる選手が投手になったりした場合（同(14)）、この時点で指名打者の役割は消滅することになるため、規則5.11(a)(2)は適用されなくなり、その指名打者は試合から退くこともできる。</p> <p>なお、規則5.11には、指名打者が負傷または病気のために試合に出場することが不可能になったときの、5.11(a)(2)に対応する規定が書かれていない。仮にこのような状況になった場合、常識として交代を認めることになるが（監督は控えの選手から新たなDHを指名し、退いたDHは試合に出場したものとみなされる）、規則としては投手の規定である5.10(f)の準用や、8.01(c)の適用とすることになる。</p> <p>末尾に次のパラグラフを追加する。</p> <p><b>2022年のOBR改正において、MLBナショナルリーグが指名打者制を正式採用したことに伴い5.11(b)に掲げられていた規則が不要となり削除となった。</b></p> <p><b>新たな5.11(b)として、先発投手に限り、打順表へ投手と指名打者の双方に同じ者を記載でき、「別々の2人」として考え、その役割を果たせる規則が設けられた。</b></p> <p><b>この規則では、投手を退いたとしても、指名打者としては続けて出場できるが、再び投手としては出場できず、またその逆に指名打者を退いたとしても、投手として続けて出場できるが、打者としては出場できないとなっている。</b></p> <p><b>また、仮に投手と指名打者を同時に退いた場合についても、その後の交代する選手は投手と指名打者の双方を兼務することはできないこととしている。</b></p> <p>例題にて確認をしたい。</p>	<p><b>2023 規則改正</b></p>
--	--	--	-------------------------

		<p>先発投手：A、5番DH：A、救援投手：B、代打者：C、7番レフト：D  ※例題にあつては、条件としてAは投手として第1打者への投球、DHとしては1打席を既に完了しているものとする。</p> <p>例題7：投手Aに代わり救援投手Bが登板した。  ——Aは投手としては試合から退いたが、DHとしてはそのまま出場できる。  (5.11(b))  打順：5番DH：Aは継続、救援投手：B</p> <p>例題8：5番DH：Aの代打者としてCが打席に入った。  ——AはDHとしては試合から退いたが、投手としてはそのまま出場できる。  (5.11(b))  打順：5番DH：C、投手：Aは継続</p> <p>例題9：投手Aに代わり救援投手Bが登板したとき、監督がDHもBにすると申し出た。  ——できない。チームにおいて、先発投手自身が指名打者としても打つことができる本規定を採用することは、最初の打順表で記載するときのみできる。  従って、DHはAが継続となり、必要であればDH：Aの打撃が回ってきたときにB以外の代打者を送ることになる。  ※Bを指名打者Aに代わって打席に立たせることはできるが、この場合、指名打者の役割は消滅し、(5.11(a)(10))、それ以後の選手の交代や打撃順の指名については、指名打者ルールを使用していないときと同じように進めていくことになる。</p> <p>例題10：投手Aがレフトの守備につき、レフトのDに代わって救援投手Bが登板した。  ——投手AはDH：Aでもあるため、指名打者は消滅し、Aはもともとの打順を</p>	
--	--	---	--

		継続し、救援投手BはレフトDの打順を引き継ぐ。(5.11(a)(5)・(8)) 打順：5番レフトA、7番投手：B	
102	1 ワインドアップポジション  (2)打者に面して立ち、……。このワインドアップポジションから、投手が一旦投球に関連して手、腕または足を動かせば、その投球を完了しなければならない。	1 ワインドアップポジション (2)及び(3)の一部を次のように変更する。  (2)打者に面して立ち、……。このワインドアップポジションから、投手が一旦投球に関連して手、腕または足を動かせば、その投球を完了しなければならない。  (3)打者に面して立ち、両手を離れた状態で、軸足を投手板の上に置く。他の足はフリー。このポジションから（両手を離して）、投手は捕手からのサインを受ける前に両手を一定の位置（“ポーズ”＜静止＞）に持ってくる。このワインドアップポジションの場合、両手を身体の前方に持ってくる動作は、身体他の部分が同時に動きを開始し、実際に投球動作を伴わない限り投球動作が始まったとはみなされない。しかし、捕手からのサイン交換後に両手を動かす動作は、たとえ身体他の部分が動かなくても、投球動作を開始したものとみなされ、そのまま静止することなく投球を完了しなければならない。走者がいるときに静止したり、変更した場合はボークが宣告される。	2022 修正  2022 変更
104	1 ワインドアップポジション  第2パラグラフ	1 ワインドアップポジション  第2パラグラフに続き、次のパラグラフを挿入する。  ただし、アマチュア野球では、投球姿勢が混乱することを懸念して、2007年の規則改正は採用せず、従来どおりの投手板の踏み方および自由な足の位置の制限を踏襲してきたが、2013年から規則書どおりに改め、従来の投手の軸足および自由な足に関する規制をした[注]を削除して、5.07(a)(1)[注1]を次のとおり改正した。	2022 規則改正

		<p>[注 1] (省略)</p> <p>「投手が投手板に軸足を並行に触れ、自由な足を投手板の前方に置いた姿勢」からの投球は、windアップポジションからの投球なのか、あるいはセットポジションからの投球なのか？</p> <p>2020年シーズンにおいて、日本のアマチュア野球の投手（右投げ）が、走者が塁にいないとき、上記の「投球姿勢」から自由な足を一塁側に一步引いた後、投球動作を止めることなく投球した。これに対して、その投手が所属する連盟は、規則 5.07(a)(1)[注 1]および同(a)(2)[注 4]②を理由に規則違反であり、正しい投球動作ではないとした。</p> <p>これ以前から MLB や NPB の一部の投手は、走者が塁にいないとき、上記の「投球姿勢」から自由な足を右投手は一塁側、左投手は三塁側に一步引いてから投球していた。また、東京 2020 オリンピックでは、準決勝の韓国の投手や決勝のアメリカの投手が同様の投球動作で投球しており、日本の野球関係者やファンの多くが視聴していた。</p> <p>MLB、WBSC、NPB では、上記の「投球姿勢」は走者が塁にいないときはwindアップポジションとして投球することができ（規則 5.07a1、同原注 1）、走者が塁にいるときはセットポジションからの投球とみなしている（5.07a2 原注）。他方、日本のアマチュア野球では、走者の有無の関係なくセットポジションからの投球とみなしていた（規則 5.07a1 注 1、5.07a2）。</p> <p>そこで、日本のアマチュア野球においても国際基準に合わせるため、2022年に次のアマチュアに関する規則改正を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5.07(a)(1)[注 1]を削除し、同[注 2]を同[注]とする。</li> <li>・ 5.07(a)(2)[注 1]を削除し、同[注 2]以降を順次繰り上げる。</li> </ul> <p>この改正により、次の点に注意が必要となる。</p> <p>①軸足を投手板と並行でなく触れるタイプのwindアップポジションの場合も、自由な足の置く場所の制限がなくなった。つまり、走者が塁にいるとき、自由な足全体が投手板の前方に置かれていたとしても、軸足が投</p>	
--	--	--	--

	<p>第3パラグラフ</p> <p>2018年の改正により、5.07(a)(2)[原注]の末尾に次の一分が追加された。</p> <p>投手は投球に際して、……、反則投球となる。</p> <p>2015年、MLBのマーリンズに在籍していた……、2017年から規則違反の投球動作とされた。今回の改正は、このような動作を禁止するためのものである。</p>	<p>手板と並行に触れていなければ、windupポジションからの投球とみなされることになる。</p> <p>②走者が塁にいない場合、「投手板に軸足を並行に触れ、自由な足を投手板の前方に置いた姿勢」からwindupポジションとして投球することができるので、自由な足を一步引いてから投球することも可能である。 (規則 5.07(a)(1)②)</p> <p>③走者が塁にいる場合(特に2アウト走者三塁のときに注意)、上記の「投球姿勢」はセットポジションからの投球とみなされるので、自由な足を一步引いてからの投球はボークとなる。 (規則 5.07(a)(2)【注4】②、6.02(a)(1))</p> <p>なお、この規則改正に合わせて、巻頭の「投球姿勢」についても変更された。</p> <p>第3パラグラフの一部を削除し、末尾に次のパラグラフを追加する。</p> <p>2018年の改正により、5.07(a)(2)[原注]の末尾に次の一分が追加された。 投手は投球に際して、……、反則投球となる。</p> <p>2015年、MLBのマーリンズに在籍していた……、2017年から規則違反の投球動作とされた。<del>今回の改正は、このような動作を禁止するためのものである。</del></p> <p>また、公認野球規則は2021年に「投手は投球に際して、<u>どちらの足も本塁の方向に2度目のステップを踏むことは許されない。</u>」と改正した(下線部を追加)。これは、OBRには2017年の改正で(“The pitcher may not take a second step toward home plate <u>with either foot</u>”)2度目のステップを踏む“足”は軸足、自由な足のいずれも規則違反であると書かれていたが、2018年時点ではなぜ禁止したのか(“自由な足を2度ステップする”とはどのような投げ方なのか)が分からなかったため、ただ単に「2度目のステップを踏むことは許されない」とした。しかし、MLBカブスのカール・エドワーズ Jr が自由な足を本塁方向</p>	<p>2021 規則改正</p>
--	--	--	------------------

		<p>に2度ステップして投球していたことが映像で確認できたため、「どちらの足も」を追加することになった。</p> <p>なお、MLB UMPIRE MANUALの2020年バージョンには、投球動作が開始された後に自由な足が地面に接触することについて、①一度だけ、②接触地点が足の最初の位置より本塁に近づいていない、③明らかな一時停止や中断がない、という条件で許されるとの解釈が加えられた。</p>	
111	4 “二段モーション”	<p>末尾に次のパラグラフを追加する。</p> <p>また、走者がいるとき、セットポジションをとった（投手板に軸足を並行に触れ、他の足を投手板の前方に置き、ボールを両手で身体の前方に保持して、完全に動作を静止した）投手がまず、軸足の踵を上げてから塁に送球した場合、投球動作を変更したものとみなし、「ボーク」とすることが、2023年2月8日のアマチュア野球規則委員会において確認された。</p>	2023 追加
111	6 投手がプレート上で手を動かす仕草	<p>投手がプレート上で捕手とサイン交換時、捕手や野手にサインを出すため胸マークや腕を触れることは、投球動作の中断となり、ボークとなる。(6.02(a)(1))</p>	2022 修正
112	7 走者がいないときは、セットポジションで静止しなくてもよい	<p>2018年の改正において、……。アマチュア野球では、……。規則5.07(a)(2)[原注]の第2パラグラフの内容に該当すると審判員が判断すれば、クイックピッチ</p>	2022 修正

	5.07(a)(2)[原注]の後段に該当すると審判員が判断すれば、・・・。	とみなしてボールを宣告することもある。 また、2022年には、windアップポジションに関する規則改正に伴い、5.07(a)(2)[注1]を削除した。(前記「1 windアップポジション」参照)	2022 規則改正
113	8 投手のウォーミングアップの制限  最終パラグラフ なお、WBSCのインテング間ブレークルール(2019年版)の主な内容は・・・	8 投手のウォーミングアップの制限 最終パラグラフを下記のように修正する。  なお、WBSCのインテング間ブレークルールについては、2022年の大会では、インテング間は第3アウトが成立した時から90秒以内、投手の準備投球は8球以内、残り30秒以内で「ワンモアピッチ」となっている。カテゴリー(U12など)によっては異なる場合もある。最新のルールについては、WBSCの資料を確認されたい。	2023 修正
115	11 投手の守備位置の変更	11 投手の守備位置の変更 第1パラグラフの全部を削除し、次のパラグラフに差し替える。 また、削除した第1パラグラフの最後のセンテンスを第2パラグラフの末尾に移動する。  規則 5.10(d)[原注]では、「同一インテングでは、投手が一度ある守備位置にいたら、再び投手となる以外、他の守備位置に移ることはできないし、投手に戻ってから投手以外の守備位置に移ることもできない」と規定している。この規則の最初の「投手」は、どういう状況の「投手」を示すのだろうか。 例題：3回裏の攻撃終了のときの投手をAとする。4回裏の攻撃が始まる前に、守備側の監督はAを右翼手に、新たにBを投手にする交代を審判員に告げた。Bが1アウトを取った後、Aが再び投手となり打者をアウトにした。守備側の監督は、再度Aを右翼手にする交代を申し出た。これは認められるか。 処置：この交代は認められない。Aは4回裏の攻撃開始の際には「投手」としてラインアップに書かれている。その「投手」Aが「右翼」の守備につくことは、5.10(d)[原注]の「投手が一度ある守備位置についた」ことに該当する。したが	2022 変更

		<p>って、再び「投手」となった A は、「投手以外の守備位置に移ることもできない」ことになる。</p> <p>もっともこの規定は、同一イニングで投手が投手以外の守備位置に2度以上つくことを禁じているだけで、イニングがちがえば何度でもほかの守備位置と投手板を往復できることはいうまでもない。また、同一イニングで投手がマウンドに戻った場合、その投手は必要な準備投球が許される。</p>	
117	13 監督、コーチがマウンドに行ける回数	<p>13 監督、コーチがマウンドに行ける回数 上から7行目の下に、次のパラグラフを挿入する。</p> <p>例題：打者 A が打席に入る前に、守備側の監督が投手のもとに向かった（1回目）。そのとき（監督がファウルラインを超えて投手のもとに向かっているとき、またはマウンドで投手と会話しているとき）に、攻撃側の監督が代打者 B を球審に通告した。この場合、5.10(0)に規定する“そのときの打者”は、A または B のどちらか。</p> <p>処置：球審は代打者 B の通告があったことを、守備側の監督に知らせる。これをもって“そのときの打者”は A から B に移ったということになる（打者 B に対して1回目のトリップとなる）。</p>	2022 変更
139～ 140	2 攻撃側チームのメンバーによる妨害 P139 最終行	<p>2 攻撃側チームのメンバーによる妨害 P139 最終パラグラフの一部を次のように変更する。</p> <p>攻撃側チームのメンバーによる妨害とは、どんな場合だろうか。例えば、次打者、・・・、ベンチまたはダッグアウト内のプレーヤー（スコアラー、トレーナー、監督、コーチを含む）などが、自分の占める場所を譲らなかつたり、ボールを拾い上げたり、捕つたり、意図的に触れたりすることや、押し戻したり、蹴つたりして、打球や送球を処理しようとする野手の守備を妨害した場合が、これにあたる。</p>	2021 規則改正

	備を妨害した場合が、これに当たる。										
147 ~148	10 振り逃げの後の打者走者の妨害	<p>10 捕手に捕球されない投球が打者または打者走者に触れた タイトルを変更し、P147を全文削除して次のパラグラフと差し替える。また、P148の表も差し替える。</p> <p>2022年の規則改正において、規則 6.01(a)(1)本文の末尾に次のセンテンスが追加された（下線部）。</p> <p>6.01(a)(1)：捕手に捕球されていない第3ストライクの後、打者走者が投球を処理しようとしている捕手を明らかに妨げた場合。 打者走者はアウトになり、ボールデッドとなって、他の走者は投球当時占有していた塁に戻る。<u>もし、捕球されずに本塁周辺にとどまっている投球が、打者または審判員によって不注意にそらされた場合、ボールデッドとなって、塁上の走者は投球当時占有していた塁に戻る。この投球が第3ストライクのときは、打者はアウトになる。</u></p> <p>これにより、捕球されずに転がった投球に対し、打者（打者走者）がなんらかの動作を伴ったことで触れてしまった場合は、この打者（打者走者）がボールに触れた場所（打者席内か否か）や、タイミング（一塁に向けて走り出す前か後か）などは関係なく、ボールのそれた距離や方向によって、捕手の守備機会を失わせたと審判員が判断すれば、そのときの投球カウントに関係なく、ただちにボールデッドとして、塁上の走者の進塁は認められないことがはっきりした。</p> <p>この改正により各種事例を整理すると次のようになる。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>事例</th> <th>処置</th> <th>関連条文</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>第3ストライク目の投球を捕手のはじき、そのボー</td> <td>ボールデッド。塁上の走者の進塁は認められず、投球</td> <td>5.05(a)(2) 6.01(a)(1)</td> </tr> </tbody> </table>		事例	処置	関連条文	1	第3ストライク目の投球を捕手のはじき、そのボー	ボールデッド。塁上の走者の進塁は認められず、投球	5.05(a)(2) 6.01(a)(1)	2022 規則改正
	事例	処置	関連条文								
1	第3ストライク目の投球を捕手のはじき、そのボー	ボールデッド。塁上の走者の進塁は認められず、投球	5.05(a)(2) 6.01(a)(1)								

			ルに一塁に向かったり、なんらかの動作をした打者走者が触れたことで、方向が変わり、守備する機会を失わせたと審判員が判断した場合	当時の占有塁に戻る。打者走者はアウトになる。		
		2	第3ストライク目および四球目でない投球を捕手のはじき、そのボールになんらかの動作をした打者が触れたことで、方向が変わり、守備する機会を失わせたと審判員が判断した場合	ボールデッド。塁上の走者の進塁は認められず、投球当時の占有塁に戻る。打者はそのまま打撃を続ける。	6.01(a)(1)	
		3	投球カウントに関係なく、投球を捕手のはじき、そのボールが単に打席に立っている打者に触れたり、当たただけの場合	ボールインプレイ（球審はナッシングのジェスチャー）。従って、打者走者、塁上の走者とも進塁は可能。	6.01(a)(1)[原注]	
		4	第3ストライクの宣告によって直ちにアウトになった打者が、勘違いで一塁に向かったり、なんらかの動作をして、故意ではなく捕手のはじいたボールに触れた場合	タイムを宣告して、守備側の不利益を取り除くため、塁上の走者を投球当時の占有塁に戻す。（アクシデントという考え方）	6.01(a)(1) 準用	
		5	四球により、安全進塁権を得た打者走者が一塁に向	ボールデッド。塁上の走者の進塁は認められないが、	5.05(b)(1) 6.01(a)(1)	

			かおうとした際に、捕手のはじいたボールに触れた場合	安全進塁権を得ている打者走者には一塁が与えられ、これにより、押し出される走者の進塁は認められる。		
6		1 アウト走者三塁で三塁走者が本塁に向かってきた際、事例1と同様のプレイが発生した場合		ボールデッド。打者走者はアウトとなり、三塁走者の得点は認められず、三塁に戻る。	6.01(a)(1) [注]①	
7		投球を捕手のはじき、そのボールにスイングした打者の所持しているバットが当たった（故意ではなく）場合		ボールデッド。塁上の走者の進塁は認められず、投球当時の占有塁に戻る。第3ストライクであれば、打者はアウトとなる。	[6.03a3・4 原注]	
8		投球を捕手のはじき、そのボールがスイングしていない打者の所持しているバットに当たった場合		ボールインプレイ（球審はナッシングのジェスチャー）。従って、打者走者、塁上の走者とも進塁は可能。	6.03(a)(3)[注1]	
9		投球を捕手のはじき、そのボールが転がってきて、打者の手から放れて地面に置かれているバットに触れた場合		ボールインプレイ（球審はナッシングのジェスチャー）。従って、打者走者、塁上の走者とも進塁は可能。	5.09(a)(8), 同[原注]準用	
10		事例9のケースで、バットが転がってきて、ボールに触れた場合		ボールデッド。塁上の走者の進塁は認められず、投球当時の占有塁に戻る。第3ストライクであれば、打者はアウトとなる。	5.09(a)(8), 同[原注]準用	
※事例1、2および6において、審判員は打者（打者走者）が捕手の守備する						

		機会を失わせたとは判断しなかった場合、ナッシングのジェスチャーをする。	
148～ 149	11 ファウルボールの進路を故意に狂わせた場合          表の④ ツーアウト後に妨害が発生した場合は、ボールカウントに関係なく、打者にアウトを宣告する。次回 の先頭打者は次打者とする。	11 ファウルボールの進路を故意に狂わせた場合 P148 第4パラグラフに続き次のパラグラフを挿入する。 P149 表の④を次のように変更する。  フェア地域に入って来そうな打球を打者または走者が、・・・、これらはいずれも審判員の判断による。 なお、2021年の規則6.01(a)(10)の改正に合わせ、ツーアウト後に走者が故意に打球の進路を狂わせた場合は、その走者にアウトを宣告し、打者は打撃を完了したとみなすこととし（打者に打席1、残塁1が記録される）、6.01(a)(10)と対応を統一した。（「 <b>13</b> ファウルボールまたはファウルテリトリ上で捕らえられた打球に対する妨害」参照）  表の④ ツーアウト後に妨害が発生した場合は、ボールカウントに関係なく、走者にアウトを宣告し、打者は打撃を完了したものとみなす。次回 の先頭打者は次打者とする。	2021 規則改正
150	13 ファウルボールまたはファウルテリトリ上で捕らえられた打球に対する妨害 第2パラグラフ   野手が守備可能な打球で結果としてファウルになるか、・・・。	13 ファウルボールまたはファウルテリトリ上で捕らえられた打球に対する妨害 第2パラグラフの一部を次のように変更する。 末尾に次のパラグラフを追加する。  野手が守備可能な打球で結果としてファウルになるか、またはファウルテリトリ上で捕らえられたような打球を塁から離れている走者が妨害した場合、走者	2021 規則改正

	<p>ツーアウトのとき、妨害が故意ではない場合は走者アウトで、打者は次回打ち直しとなる。審判員が故意と判断した場合は、打者をアウトにする。(5.09(b)(3)、6.01(a)(2))</p> <p>なお、・・・以下省略</p>	<p>は妨害でアウトとなって、打者はワンストライクがカウントされる(通常のファウルどおり)。</p> <p>ツーアウトのときは、2021年の改正により、妨害が故意であったか故意でなかったかに関係なく走者にアウトが宣告され、打者は打撃を完了したものとみなされる(打者に打席1、残塁1が記録される)。(5.09(b)(3)、6.01(a)(2))</p> <p>なお、・・・。(5.09(b)(3))</p> <p>ツーアウトのときに妨害をした走者と打者との取り扱いについては、2021年の規則6.01(a)(10)の改正に合わせ、同(2)のケースも統一することとした(「<b>①</b>ファウルボールの進路を故意に狂わせた場合」参照)。ここで問題になるのが、6.01(a)インターフェアに対するペナルティ[原注1]の第2・第3パラグラフに書かれている「塁についている走者が故意に守備を妨害した場合」との違いだ(「<b>⑧</b>ベースについている走者が妨害」参照)。<b>[原注1]</b>の第3パラグラフには「2アウトのときは、打者にアウトを宣告する」と書かれていて、2020年のOBRも改正されていない。</p> <p>この件について、アマチュア野球規則委員会は、次のように整理することとした。</p> <p>①走者が打球を処理しようとする野手を妨害した場合、それがフェアボールかファウルボールかの区別なく、また、故意であったか故意でなかったかに関係なく、妨害をした走者がアウトになる、これが大原則である。(6.01(a)インターフェアに対するペナルティ[原注1]第1パラグラフ)</p> <p>②正規に占有を許された塁についていた走者が、フェア地域とファウル地域との区別なく、故意ではなく野手の守備の妨げになった場合は、上記①の大原則の例外規定として、その走者はアウトにならない(同[原注1]第2パラグラフ)。つまり、守備妨害はなかったことと見なすということである。</p> <p>③この例外規定の走者が、故意に野手を妨げた場合のペナルティとして、2アウトのときは打者をアウトにする。</p> <p>④なお、正規に占有を許された塁についている走者であっても、6.01(a)(11)の</p>	
--	--	---	--

		<p>(A)及び(B)に該当しないとき、フェアボールに触れた場合はアウトになる。</p> <p>⑤まとめると、走者が打球を処理する野手を妨げたとき(打球に触れる場合を除く)、それが故意であるかどうかは問題となるのは、正規に占有した塁についている走者が妨げたときであって、塁を離れている走者については、①に示した大原則の通り、故意であったか故意でなかったかに関係なく妨害が成立し、その走者がアウトになる。</p>	
162	22 ベースコーチの肉体的援助	<p>22 ベースコーチの肉体的援助 第2パラグラフに続き、次のパラグラフを挿入する。 また、例題1の前に次の二つの例題を追加、以下例題の番号を繰り下げる。</p> <p>ベースコーチが、走者の帰塁または離塁を“肉体的 (physically)”に“援助 (assist)”したとは、どういうことか。</p> <p>“肉体的 (physically)”とは、物理的に(実際に)ベースコーチが走者の身体に触れることを言っていて、身体に触れない場合は“肉体的”に援助したとは言えない。</p> <p>次に、“援助する (assist)”を考えたい。“援助する”とは“助ける”ことであり、ここでは走者が帰塁または離塁することを“助ける”ことである。つまり、ベースコーチと走者が接触しても、結果として走者の帰塁または離塁を“助ける”ことにならなければ、この規則は適用されないことになる。</p> <p>1972年までは、・・・。</p> <p>塁に複数の走者がいる場合、・・・。</p> <p>例題1：打者が場外本塁打を打ち、三塁を回ったところで三塁ベースコーチとハイタッチしてから、本塁に進んだ。 ——三塁ベースコーチは走者に触れたが、その走塁を“援助した”とは認められず、妨害は宣告されない。</p>	2022 変更

		<p>例題2：1アウト、走者二塁で、打者がライト前ヒット。二塁走者は三塁をけって本塁に向かった。ライトは本塁に向けて送球した。三塁ベースコーチは、腕を回して進塁を指示していたが、勢い余って走者が向かってきたので避けようとしたが間に合わず、走者と接触した。走者は進塁をあきらめ、三塁に戻った。</p> <p>①審判員が、三塁ベースコーチは走塁を“<u>援助していない</u>”と判断した場合</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・妨害は宣告されず、ボールインプレイの状態は続く。この場合、審判員は“ナッシング”のジェスチャーをする。</li> </ul> <p>②審判員が、三塁ベースコーチは走塁を“<u>援助した</u>”と判断した場合</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボールデッドとして二塁走者にアウトを宣告する。打者走者は妨害発生の瞬間の占有塁に留め置く。なお、走者が三塁ベースコーチと接触した後に本塁に向っても、同じ対応となる。</li> </ul> <p>例題3：走者三塁で、打者が一塁ゴロを打った。・・・。</p>	
173	<p>36 競技場内に入ることが許された人がプレイを妨害した場合 第3パラグラフ</p> <p>妨害が故意であったか否かは、・・・故意の妨害とはみなさない。しかし、ボールを蹴ったり、拾い上げたり、押し出したりした場合には、本人の意思とは関係なく故意の妨害と見なされる。(6.01(d)[原注])</p>	<p>36 競技場内に入ることが許された人がプレイを妨害した場合 第3パラグラフの一部を次のように修正する。</p> <p>妨害が故意であったか否かは、・・・故意の妨害とはみなさない。しかし、ボールを拾い上げたり、捕ったり、意図的に触れたりすることや、押し戻したり、蹴ったりした場合には、故意の妨害と見なされる。(6.01(d)[原注])</p>	2021 規則改正
185	<p>5 サスペンデッドゲーム</p>	<p>5 サスペンデッドゲーム（一時停止試合） 第2パラグラフの一部を次のように変更する。また、末尾に次のパラグラフを追加する。</p>	2022 変更

	<p>現在、日本のアマチュア野球では、全日本軟式野球連盟だけが特別継続試合という方式で、サスペンデッドゲームのルールを準用している。「競技に関する連盟特別規則」で以下のように取り決められている。</p>	<p>現在、日本のアマチュア野球では、全日本軟式野球連盟と日本高等学校野球連盟が継続試合を行っている。全日本軟式野球連盟では「競技に関する連盟特別規則」で以下のように取り決められている。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 省略</li> <li>2 省略</li> <li>3 省略</li> <li>4 省略</li> </ol> <p>日本高等学校野球連盟では、2022年から選抜高等学校野球大会、全国高等学校野球選手権大会及び全国高等学校軟式野球選手権大会において、天候状態などで球審が回の途中で試合の打ち切りを命じた場合は、行われた回数に関係なく、翌日以降に勝敗を決するまで継続して試合を行うこととなった。</p> <p style="text-align: center;">第1パラグラフに続き、次のパラグラフを挿入する。</p> <p style="text-align: center;">2023年の規則改正において、7.02(a)(5)サスペンデッドゲームに関する改正がされ、天候により試合が途中で打ち切られた場合について、正式試合として成立する前においても回数(イニング)や両チームの得点および得点の経過などに関係なくサスペンデッドゲームとして適用できることとなった。</p>	2023 規則改正
186	<p style="text-align: center;">6 タイブレイク</p> <p>その後、国際大会はもちろん、国内の大会でもタイブレイクの適用が主流となっている。2018年意向の各連盟によるタイブレイクの規程は次のとおりとなっている。</p> <p>WBS C : 10回から、・・・</p>	<p style="text-align: center;">6 タイブレイク</p> <p style="text-align: center;">第3パラグラフの一部を削除する。</p> <p>その後、国際大会はもちろん、国内の大会でもタイブレイクの適用が主流となっている。<del>2018年意向の各連盟によるタイブレイクの規程は次のとおりとなっている。</del></p> <p><del>WBS C : 10回から、ノーアウト一・二塁、継続打順制</del></p> <p><del>社人 : 10回または12回から、ノーアウト一・二塁、継続打順制</del></p> <p><del>夫学 : 10回から、ノーアウト一・二塁、継続打順制</del></p>	2023 修正

	<p>社会人：10回または12回から・・・          大学：10回から・・・          高校：13回（国体及び・・・          軟式：13回から・・・</p> <p>チームおよび個人記録・・・          以下、省略</p>	<p>高校：<del>13回（国体及び明治神宮大会は10回）、ノーアウト・・・二塁、継続打順</del>  <del>——制</del>          軟式：<del>13回から、ノーアウト・・・二塁、継続打順制</del></p> <p>チームおよび個人記録は公式記録となるが、・・・          以下、省略</p>	
191	<p>2 キャッチ</p> <p>例題：チップしたボールが、最初に捕手ミットに触れてから身体に当たってはね返り、捕手はこれを地面に触れる前に、ミットを胸にかぶせるようにして捕らえた。          ——正規の捕球である。（定義 34、5.09(a)(2) [原注]）          以下省略</p>	<p>2 キャッチ</p> <p>例題以降を次のように変更する。</p> <p>例題：チップしたボールが、最初に捕手のマスク触れてはね返り、捕手はこれを地面に触れる前に、ミットを胸にかぶせるようにして捕らえた。          ——正規の捕球である。（定義 34、5.09(a)(2) [原注]）</p> <p>2021年に規則 5.09(a)(2)【原注】の後段が改正された。チップしたボールが、最初に捕手の身体または用具に触れて、はね返ったものを捕手が地上に落ちる前に捕球した場合、正規の捕球となった。それまでは、「最初に捕手の手またはミットに触れてから」身体または用具に当たってはね返ったのを・・・となっていたので、2020年までの規則のもとでは、例題のケースは正規の捕球とならず、ファウルボールとされていた。</p> <p>また、OBRの2020年の改正で同【原注】第2パラグラフ後半の「また、チップしたボールが、最初に捕手の手またはミットに当たっておれば、捕手が身体または用具に手またはミットをかぶせるように捕球することも許される。」という一文が削除された。日本野球規則委員会は、これはチップしたボールと捕球の関係における規則改正により削除されたものと判断し、「身体または用具に手またはミットをかぶせるように捕球することも許される」という解釈は今までのとおりとしている。</p>	2021 規則改正

		<p>なお、この規則 5.09(a)(2)【原注】後段の改正に合わせて、定義 34 ファウルチップにおいても同様の改正が行われ、これにより同【注】を削除した。</p> <p>ところで、例題のケースで、はね返ったボールを投手が地面に落ちる前に捕った場合、正規の捕球となるのだろうか。規則 5.09(a)(2)【原注】後段では、「“捕手が” 地上に落ちる前に捕球した場合」と書かれているので、チップしてはね返ったボール（投球）を投手や内野手が捕ったとしても正規の捕球とはならない。飛球の場合の規則 5.09(a)(1)との違いをよく理解していただきたい。</p>	
--	--	---	--